

火野葦平「赤い国の旅人」の成立と新中国認識

——「中国旅日記」との比較および、初出雑誌削除問題を中心として——

増田周子

はじめに

火野葦平は中国と関連の深い作家である。一九三二年一月上海事変が勃発、苦力がストライキをおこした。それを鎮めようと沖仲士の会社玉井組を経営していた父と共に上海へ行くのが火野の初めての訪中であった。この時の体験が小説『魔の河』¹⁾にも描かれている。その後一九三七年九月陸軍伍長として応召されてからは、杭州に向けて出撃、南京攻略にも参加し、一九三八年四月 中支派遣軍報道部へ転属。以後、戦争終結まで、広東、海南島、南京、満州、北京を転々とし報道班の一人として中国をまわったのであった。これらの戦争体験がミリオンセラーとなった兵隊三部作を生み出すきっかけとなった。戦後は、侵略戦争に参加し、多くの戦争作品を書いたことを理由に一九四八年三月に、公職追放を受けるが、一九五〇年一〇月には、公職追放を解除される。

本稿で扱う、「赤い国の旅人」は、火野葦平の公職追放解除後、政府の代表として解放後の新中国を視察して描いたルポルタージュ的小説である。発表当初から「小説としての密度は十分とはいえない」としながらも「『戦争文学者』のものである点で、努めて書かれた作品としても注目すべきものである」²⁾「この二三年來の数多い火野の作品のどれよりも、私には、一ばん読みごたへがあつた。(中略) 火野の浩瀚な著書のなかで、『麦と兵隊』が代表作のうちの一随一の一つであり、この『赤い国の旅人』は、幾つかの代表作の中の随一である、と信じる」³⁾と、大いに注目され、概ね評価も高かった作品である。

しかし、「赤い国の旅人」は、これまで殆ど研究されてこなかった。同時代批評が数編あり、田中艸太郎が『火野葦平論』⁴⁾で「『赤い国の旅人』一篇は、火野の旧中国に対して犯した暗い自責を経糸とし、新中国の力の政治に対する反撓と疑義を緯糸として織りなし

た精神の記録である」とはやくにとりあげた。その他、藤原耕作「『赤い国の旅人』——葦平の見た中国」などが主要先行論文である。「赤い国の旅人」の成立過程は、非常に複雑である。二〇一〇年になるまで、作品の元となった火野葦平の自筆の「中国旅日記」というメモ風の日記の存在も公には知られてはいなかった。また、初版本『赤い国の旅人』と初出「赤い国の旅人」は本文が異なり、初出は大幅に削除されているが、それについて触れた論文もない。

本稿では、先の藤原耕作論文なども含めたこれまでの先行論文ではとりあげてこなかった「赤い国の旅人」の成立に関わる事柄や題材をとりあげ、「中国旅日記」と作品を比較検討することで浮かび上がる相違点や共通点を明らかにしていく。さらに初出雑誌では発表できなかった部分に焦点を当て、火野葦平の新中国認識について考察していきたい。

一 「赤い国の旅人」と「中国旅日記」の比較

一九五五年四月六日から一〇日までインドのニューデリーで、アジア諸国会議が開催された。このアジア諸国会議には、一四カ国の代表二〇〇名が参加し、日本は、「政治問題」「宗教問題」等六部門三四名と、オブザーバー二名を派遣した。火野葦平も、「文化問題」の日本代表団九名のうちの一人としてインドに派遣されたのである¹⁰。アジア諸国会議の帰途、火野葦平を含む二八名は、中華人民共和國の招待で訪問し、解放後の新中国の様子を見ることとなった。

火野葦平は、新中国訪問中の様子を克明に「中国旅日記」に記している。また、現地から、多くの日本のメディアに記録通信文を発信した¹¹。帰国後、その日記や記録通信文をもとにして、「赤い国の旅人」(『文藝』一九五五年一〇月一日～十二月一日)という紀行文的小説を連載したのである。その後、「赤い国の旅人」と、ニューデリーのことを書いた「花と牛と乞食の街」¹²「或る若いインド作家」¹³「不可触賤民」¹⁴や、中国の後に訪れた朝鮮でのことを記した「板門店」¹⁵「北鮮女性点描」¹⁶、撫順の戦犯を訪問して記した「撫順プリズンの戦犯たち」¹⁷を加えて、合計七作品を収載した初版本『赤い国の旅人』(一九五五年二月二五日、朝日新聞社)を刊行する。以上が作品成立の経緯である。

では、「赤い国の旅人」の成立に重要な意味を持つ「中国旅日記」とはどのようなものであるのか。まずは、外面的な点を簡単に説明してみる。「中国旅日記」とは、横九・五cm、たて一三・五cmの黒表紙の「MEMORANDUM」と書かれた手帳であり、全一六八頁のものである。一九五五年四月二日から五月四日までの新中国の訪問中の出来事を詳細に綴った日記風の「メモ」で、創作ノートのな意味合いをもつ。中国カレンダー、地図、映画、観劇したポスターやパンフレット、領収書、新聞切り抜きなどを細かく添付しているのも興味深い。火野葦平自身が冒頭に、「中国旅日記」(一九五五年四月)と記しているので、本稿でも「中国旅日記」として総称する。ここで、火野葦平の一九五五年のアジア諸国訪問日程を確認して

おく。火野葦平は、一九五五年四月六日から一〇日間アジア諸国会議に出席した後、四月一九日にデリー飛行場を出発し、四月二一日香港経由で中国に入国する。五月一七日から二六日まで平壤へ滞在し、その後、北京入りし、六月九日、日本に帰国する¹⁸⁾。「赤い国の旅人」の末尾には、五月五日から、六月九日までの平壤行きや日本に帰国するまでの予定は記されているが、「赤い国の旅人」に詳細に書かれているのは、四月二日から五月四日までの新中国の出来事である。「赤い国の旅人」はルポルタージュ的な面があるため、日記体裁で日付ごとに作品世界も進んでいる。つまり、作品に描かれる日付は、「中国旅日記」とほぼ一致している。さて、どんな点が「中国旅日記」とは異なるのであろうか。

「中国旅日記」では、一行は実名で登場するが、「赤い国の旅人」は、実名と偽名が混在する。例えば、作品にも日記にも実名で登場する人物としては、中村翫右衛門がいる。中村翫右衛門は、一九五二年五月末、貸さないと断られた空知郡赤平町豊里小学校の屋内運動場を強引に使用した住居侵入罪で指名手配中で、中国に密入国し、逃亡中の身であった¹⁹⁾。火野は、訪中時に、翫右衛門に会い行動を共にした。その他にも、作品中に通訳として登場する李徳純は、平成二二年現在中国社会科学院で特約研究員をしている方である。一九四四年に来日し、旧制一高に留学、帰国後井上靖、三島由紀夫など多くの日本近代文学の翻訳を手がけた²⁰⁾。同じく通訳の蘇琦は、一九二八年に台湾で生まれ、華北大学を卒業した。一九七五年

に、国家外交文局研究室研究員と毛沢東詩詞翻訳組組長となった。のちに、北京第二外国語学院副院長等の職務を歴任した。劉心武著『北京下町物語』（一九九三年二月 恒文社）を翻訳している。

また、「中国旅日記」はメモ的なものであるので簡条書きであるが、「赤い国の旅人」は散文体である。作品で火野という名で登場する人物「私」、勿論、作者火野葦平を指すと思われる人物が出てくる。すなわち「赤い国の旅人」では火野葦平の心情がより詳細に書かれる点が、日記と大きく異なる点である。例えば、最初の四月二日には、火野の言葉として次の如くの記述がある。

私は私の立場とこれまでのありかたとを十分反省して、できるだけ控え目に、出しゃばらないように小さくなって、ただ新中国の実態をつかみたいと意図したのであった。革命後の中国は昔とはすっかり変わったといわれている。ほんとうか、どうか？ 変っているならどんな風に変っているか？ よく変っているか、悪く変っているか？ 変りかたに納得が行くか行かぬか？ 肯定できるか、否定しなければならぬか？ それはただ行きずりの旅人が未知の国の風光文物を観光するといふのんきなものではなく、私自身の全精神にひびくもの、人間として、作家として、また日本人としての強い連繋と責任とを感じるものとして、私を緊張させていた。たしかに重苦しい気分には私はとぎざされていた²¹⁾。

重苦しい気分にとらえられながらも、正しく新中国の悪い面、良い面を見ようという意識が働いている。また、同じく火野は、

私が中国からは敵と目される人間の一人であるという自覚は、私を単なる旅人というのどかさから閉めだしたのみならず、いつか私にひとつの強迫観念さえ植えつけていた。一行中の左翼人の或る者は終始私を戦犯呼ばわりし、インドにいたときから、いかな火野さんでも偉大なる新中国の建設の姿を見たら洗脳されるだろう、もしそうでなかったら、もうあなたは終りだといっていた。私のこれからの中国行は見物どころではなく、人間として、作家として、そして、日本人として、終りになるかならぬかの瀬戸際という次第なのであった。⁽²²⁾

と記す。これは、火野に執拗に意地の悪い言い方をする人物常久さんという方の言説を受け止める場面であるが、過去に侵略戦争に行き、加害者側の立場に立たされた火野が、その事実を重く受け止めながら、解放された新中国の以前との違いを一人の人間として見、作家として正確に感じたことを伝えるという使命を持って旅に臨むという設定にしているのである。常久さんの役割は非常に重要である。火野を批判する人物を配することにより、自己を相対化し、物を客観的にとらえることができる。火野の目線で見ただ白形式で

作品は進行するが、常久さんの批判により、作品が独善的になつていない。続いて「中国旅日記」との相違を説明していく。

「赤い国の旅人」では、一行は四月二日に香港を経由して広州に渡り、愛群大厦⁽²³⁾に宿泊する。火野は自由時間にペラペラの広州市内地図⁽²⁴⁾を買い、珠江のほとりを歩き、蛋民船を見学する。作品中には、新中国からは一切の売春制度、売春婦が一掃されたといわれているとあり、通訳は、「解放後の中国には、どこの街に行つてもありませんよ。新中国からは悪い考えのものはみんななくなったのです。ドロボウ、バクチ、売春、乞食、金貸し、ボス、贅沢——封建思想とたたかうことが新中国の使命です」⁽²⁵⁾などと言う。しかし、火野は、広州では売春婦を見たと作品中に記す。新中国政府の説明とは異なる見解でも、正直に見たままに作品に描くのである。つまり、先入観を持って新中国を書かず、何物にも左右されない火野の精神が垣間見られる。

四月二二日には、越秀山に行き五階建の広州博物館や中山記念堂、農民講習所などを見学する。「中国旅日記」では、博物館で見た文物が詳細に記録され、農民講習所のことは、質素な机、粗末な椅子などとメモ風に記し、壁に掛けてあった札などを模写している。⁽²⁶⁾しかし、それを見た感想などは日記には記されていない。作品中には、

寝台や机にさわってみたり、ためいきをつくようにして、す

ばらしいと感歎の声をもらしたりする。私とて現在のような革命の大事業が、こういうささやかな場所のささやかな努力から実を結んだことについての感動は小さくなかった。²⁷⁾

と農民講習所を見た感動を表現している。その後、中山大学を見学し、そこでも、学生の学費、月謝、食費の一切が国家によって賄われることを羨ましく見、卒業後の進路も決まっていることで、日本の大学生が暗澹とした進路に怯えるよりはいいと、新中国の良い面を見た感想を率直に記述している。日記には中山大学の様を記しているのみである。

作品の、四月二二日に、水上民歌「漁民対唱」（珠江区 文化館編印）という歌が引用されている。「中国旅日記」にはこの歌の楽譜が一枚の謄写刷りとして挿みこまれていた。当然中国語で記されていて、葦平はそれを日本語に翻訳し中国語の下に丁寧な日本語訳をつけていた。²⁸⁾「赤い国の旅人」では、日本語訳のみが記される。解放後の新中国を漁師の眼で歌った歌であるが、政府機関が作らせ、当時流行していた歌であろう。全文を引用してみる。

あなたの前にきた漁り舟、／ゆらりゆらりとゆれただよう。
珠江の川面に陽がのぼってきた。／ヘサキの漁師の身体はたくましく／着物の下から銅色の胸が光る。／かれは顔いっぱいに笑みをたたえ、／船尾にいる姑娘をちらと見た。／とき

には高い声でうたい／ときにはひくい声でつぶやく。／なんだかうれいことでもあるようだ。／思えば国民党のときは／涙が海のようにながれたが、／解放された今は心もののびのび。／苦労してとった魚はボスにまきあげられ、／命から二番目の網も着物までも奪われた。／のこった数匹を売ろうとしても／大きな秤にかけられて／ちっぽけな魚のようにごまかされた。／共産党になってからのおれたち漁師は／気持もゆったり川のように。／ごらんよ、苦労してあげたこの網を。／魚、エビ、カニなどがどっさり／自分たちで腹いっぱい食べたあと、／のこった魚は国营魚市場で買いあげてくれる。²⁹⁾

「解放された今は心もののびのび」になった。昔は「苦労してとった魚はボスにまきあげられ」ていたが、「共産党になってからのおれたち漁師は／気持もゆったり川のように。」というフレーズがある。「赤い国の旅人」では、このフレーズの後、火野の感想として「搾取があらゆる面から消滅することを願うのは、なにも共産党にかぎったことではないのである」³⁰⁾と断じ、単純に、新中国の共産党政権だけがいいものであるとは結論づけたりはしない。そこには、訪中で書いた「中国旅日記」をいったん離し、客観的にそれを見、精査してから作品に取り込むという火野葦平の冷静な手法がうかがわれる。葦平は、ノートを残すことが多く、戦前の戦争小説は、あま

り、自己の意見を入れず、ルポルターージュ的に戦争を記していこう
ということを試みていた。³¹⁾

戦後に書かれた「赤い国の旅人」は、公職追放を受け、侵略に加担した過去の反省に立ち、一度、見たままを書いてきたものを自己から離し、それに対する意見や見解を加え、正直に記していこうという試みが見られる。文学的にもより成長したといえるだろう。

ここまで広州での出来事について、詳細に説明してきた。一見、作品の方が優れているように見えるが、「中国旅日記」には、作品にはない面白さもある。作品中には絵はないが、日記には葦平の手書きの絵がいくつも書かれている。例えば、四月二四日の武昌の堤防工事、漢口での鉄道工事、工人文化宮で見た漫画絵等³²⁾である。特に漫画絵は重要である。作品には漫画絵の説明が次のようにある。

稚拙だが皮肉な漫画がはりだされてあった。左よりに描かれた日本陸軍大将の軍服を着た骸骨が、左手に鞭をもって上方にある一枚の絵をさし示している。その絵には一九四五年の年号が入られ、八字ヒゲをはやした日本軍人が胸に刀をつきたてられて死んでいる。骸骨は右手にいる、U・Sの帽子をかぶったアメリカ兵になにか教えている態である。アメリカ将校は一冊の大きな本をかかえているが、それには「侵略的方法・東条著」の文字が入っている。説明文——
米帝国主義「サンキュウ、侵略の先輩、たいへん講義はよく

わかった。さよなら」

東条「待ちなさい。まだ最後の一課がのこつとる。これを忘れるな、これを忘れるな」³³⁾

これだけでは、読者はイメージがわからないが、日記に記されている絵を見ると葦平の見た絵がズバリとわかる。

作品中では「中国人がなおどんなに日本の侵略を憎んでいるかわかるようで、私は気がまた重くなった」と書く。当時の新中国の日本の侵略批判が鋭く心に響くのである。以上、作品の特徴と「中国旅日記」の特徴を示してきた。次章では初出雑誌『文藝』で発表出来なかつた箇所がどのような意味を持つのかということ考察していきたい。

二 初出「赤い国の旅人」の削除問題

a 削除部分の概要と五月二日まで

『文藝』に発表した「赤い国の旅人」と初版本に収録された「赤い国の旅人」は、本文の内容が異なる。『文藝』の最終回は、一、二回目の連載分(四〇〇字詰め原稿用紙約一〇〇枚分)に比べて、約半分と非常に短い。最終回の「後記」に、火野葦平自ら「百枚ずつ三回という約束で書きはじめたのですが、三百枚では足らぬうへに、或る事情のため、第三回目は五〇枚ほどしか発表できぬ仕様にまりました(中略)この続編は書き下ろしとして朝日新聞社から単

行本として刊行されることになって居ります」と述べている。

では、初出と初版本の対応箇所はどうなっているのでしょうか。初出「赤い国の旅人」の第一回目にあたる『文藝』（一九五五年一〇月一日、第一二巻一三号）は、初収本『赤い国の旅人』の四月二一日から二四日まで、第二回目の『文藝』（一九五五年一月一日第一二巻一四号）は、初収本『赤い国の旅人』の四月二五日から四月二九日まで、第三回目の『文藝』（一九五五年二月一日第一二巻一五号）は、初収本『赤い国の旅人』の四月三〇日から五月一日までにあたる。つまり、初収本では、四月二一日から五月四日までが描かれているのに、初出『文藝』では、五月一日までとなっている。初出版と初版本の対応箇所の異同を検討してみたが、語句の訂正や句読点を加えたりした程度で、作品内容に関連する書き換えはなかった。

初出の最終回は、一九五五年二月に発表し、同月に初版本も刊行されていることから、原稿が初出発表時の一二月に書けていなかったたので『文藝』に発表できなかつたとは、到底考えられない。火野の言う「或る事情」というのは、『文藝』の編集部から、掲載を差し止めされたのではないかと推察される。では、発表できなかった部分は、どんな内容なのであろうか。五月一日より少し前の日付から内容を見ていきたい。

四月三〇日、火野は、自分が昨日の天皇誕生日を忘れていたこと気づき、深い洞察をしていく。敗戦後、天皇制については戦中と

異なる見解を持つが、天皇を憎む気持ちは起こらなかった。常久さんの言うように「勝敗だけをもって一切の判断や断定の基礎とすることについて、どうしても疑問が抜けきれない」ことを考える。そして、火野は、

新中国は私の眼に、迷いのない明快な国と化したように映っている。しかし、そのかがやかしい断定の背後に、はたしてもはやなんの迷いもないであろうか。³⁶

と思考していく。そのうち、毛沢東が石川五右衛門のように見えはじめる。五月一日の天安門広場での慶祝五一国際労働節の賑やかな光景が最も決定的となった。毛沢東という「偉大なる英雄の絶対的存在が作りだしている幻想的雰囲気」、「魔法」³⁷のようなものについて考え込み、天皇よりも遠い存在ではないかと思いはじめるのである。五月一日には、新中国の良さよりも悪い面が強調されていく。

五月二日からが、『文藝』で削除された箇所である。五月二日には、火野の見解として、「特定の誰かが見ているという狭い眼ではなく、漠然とだが、つねにあらゆる人たちの眼がそそがれているという圧迫感、或る息苦しさ」³⁸を感じるとあり、閉塞して見張られているかのような新中国の様が書かれる。また、「赤い国全体の思想の眼」³⁹というものが不気味であり、窮屈でもあったと述べている。

北京は広州とは異なり、売春婦も蠅や蚊も全て退治されていた。火野は、「国民の自覚による自発的行為」という名の元に、全ての汚いものを排除していこうとする新中国の強権に疑問を持っていく。そして、

国民の自覚と自発的行為が、実際は他覚であり他発的行為なのではないか。私は人間というものは一種の滑稽動物で、頑固なまでに暗愚な稟質であり、自覚や自発的行為などというものはなかなかやらないものだという風に考えていた。(中略) 六億もの中国人が、五千年もやらなかった自覚を、わずかに解放後の五年間でやったとすれば、それこそ革命の名に値する。しかし、それが政治革命であるか、人間革命であるか、そこに大切な鍵があると私には思われるのだった。^④

と記すのである。とにかく、政治的統一のために人間を同じことに向かわせる体制に懐疑的になっていく姿がわかる。まるで、人間コントロールである。また、削除に値する表現が五月二日には次のようにある。

現在の日本では大臣を罵倒しようが、天皇陛下の悪口をいおうが罪に問われることはない。戦時中はそうではなかった。全体主義ファッショ体制は自由を許さないからである。

現在の中国がどうもそうらしい。毛沢東を批判したり悪口をいったりすることは反革命の第一で、ただちに投獄されるのである。赤色全体主義ファッショ体制が確立しているようである。すべての力はその専制独裁政治から出て来るのであって、建設のすばらしさも、産業の発達も、国民生活の向上も、「悪い考え」の絶滅も、自由を封じた勢力からの所産なのだ。偉大なる毛沢東の英雄像がその頂点にそびえたち、御神体のように光りかがやいている。私は密告のもたらす人間の不安を考えると、表面の現象を支えている力に疑義がわく。^④

毛沢東共産体制がファシズムと似通っていて、いわゆる「赤色全体主義ファッショ体制」であるという描写は、たとえ火野個人の見解だとしても、掲載に慎重にならざるを得なかったであろう。政治に関わる問題は出来るだけ掲載をやめるという編集方針を『文藝』が選択したのではないだろうか。

さて、この引用箇所の後半であげられているように、削除された部分の中で、最も重要なのは密告に関する部分である。「中国旅日記」には、火野がのちに帰国してから挿みこんでいた新聞記事がある。^④この記事は、火野が「赤い国の旅人」に関連する記事として、切り抜いてスクラップした重要なものである。そこには、

どんな小さな田舎の駅にも「反革命分子を徹底的に粛清」と

いうピラがはられていないところはなく、新聞は毎日反革命分子の検挙を書き立てている。しかも中共の党員や政府機関の職員の中からもどしどし検挙されており、党内に潜入している分子に摘発の主力がそそがれているようだ。考えてみると、おたがいがおたがい信じ合うということができなくなるのではないかと思われる。

とある。火野は、密告についてかなり恐ろしさを感じていたのであろう。火野が中国に滞在していた時、ちょうど毛沢東共産党政権に反対した人々を密告し、逮捕させるということが流行していた。その密告は時にはでつち上げのようなこともあった。その体制を見て、火野は徐々に、戦争中の自由にももの言えなかった日本の軍国主義政策とオーバーラップさせていくのであった。

新中国があらゆる面においてよくなっていることは否定できないし、学ぶべき点も多いとすれば、この矛盾はなにによって解決したらよいか。⁽⁴³⁾

と悩んでいく。次節では密告問題についてより深く考察する。

b 胡風密告問題および記録配信文と作品

削除問題では密告のことが重要だと述べたが、その密告問題のう

ち最大のものは、胡風問題であろう。火野が新中国を訪問中はいわゆる胡風問題でもちきりであった。胡風問題について簡単に説明する。胡風は、一九二九年に、慶応大学に留学した。日本共産党、プロレタリア科学研究所にも加わり、小林多喜二、江口渙、秋田雨雀などとも親交を持った。一九三三年、日本の警察に逮捕され、上海へ強制送還される。その時無名だった胡風は、周揚によって魯迅に紹介され、中国の左連の指導部となった。それが、一年後には周揚と関係が悪くなり、胡風は国民党と繋がりと噂され、結果的に左連辞任に追い込まれる。その後、メディアで、数多くの文人と多くの論争を繰り返す。一九五四年愈平伯の胡適思想批判がはじめられ、それに関連して胡風は、『文藝報』の編集部や、文化官僚を批判していく。そこで袁水拍や周揚が胡風に対して反論を繰り返した。一九五五年一月、『文藝報』に胡風批判の文章がとりあげられ、一連の動きを見た毛沢東は胡風を反革命分子と断定し、一九五五年五月一六日に逮捕する。以後一九七九年に釈放されるまで、投獄生活を送ったのである。⁽⁴⁴⁾

作品の五月三日には、『人民日報』の胡風批判の記事がとりあげられている。火野は、「批判というより罵倒に近い」ものを感じていた。胡風批判は政治問題であり、「胡風を反革命分子として葬り去ることが、政府にとって必要なのであろうと思われる⁽⁴⁵⁾」と記している。後に、胡風事件がでつちあげ事件で、歴史の過ちであり、長きにわたった投獄が批判されるべきことであることは証明された

が、この時期の火野の見解は、そのような結論が出ていない時であり、非常に冷静であった。火野は、「胡風の哲学は主観的唯心論で、客観的唯物論とは反対側にある。マルクス・レーニン主義を表にはかかげてはいるが、実際は反党的陰謀家で、国民政府と通じていた形跡もある。いま彼の思想検査をやっている」などと、聞かされるうちに、何故、思想の自由が保証されないのかを考え、新中国に対する魅力を失っていく。また、作品には、「毛沢東刈りという頭の恰好も流行しているとのことだ」が、「ヒトラー髭というのが昔はやったことがあるが、こういう流行には首をひねらずには居られない」⁴⁷とある。ここでも、全て毛沢東方針一点張りの中国政策に疑問を感じ、そこにファシズムの片鱗をみるのであった。興味深いことがある。先に、火野は、中国から多くの記録配信文をメディアに送ったと記したが、そのうち中国の著名な作家である老舎と対談した記録があるので、引用してみる。

解放後の中国では作家はすこぶる恵まれている。作家のみならずすべての芸術家、俳優、舞踊家、歌手、音楽家、美術家等は国家から生活を保証されているので、食うための苦労はすこしもなく、ひたすら芸道に精進することができる。追いまくられて書かなければ一カ月も暮らせない哀れな日本の作家にくらべて、羨ましい次第だと私は思った。一つの作品を書いて次の作品を書くまでなんの心配もないし、もし金の

必要があれば作家協会で融通する制度もあるという。次の作品の収入で返せばよいのである。日本の作家は一つの作品と次の作品との間がきわめて短期間であるばかりでなく、期間のまるでないこともあり、同時に並行していくつかの作品を書いているような場合も珍しくない。⁴⁸

実際、火野は中国で老舎と対談した時には、このように、新中国の作家は羨ましいと率直に思ったのである。しかし、「赤い国の旅人」には、

作家の生活はたしかに羨むに足りるが、保護されているのは国策の線に添う御用作家ばかりであって、自由奔放な作品をかきたい作家は受け入れられないのである。そのみか反革命とって批判されたり粛清されたりする。私はこの圧力には到底耐えられない。国家から見放されても、メ切に追われ、カインツメにされても、日本の方で文学をやりたい。勝手なものが書きたい。戦争中、軍と大政翼賛会との統制下にペンを鎮でしばられた体験は、思いだしても身ぶるいする地獄であった。赤い国に来て赤い文学を書いて居れば楽かも知れないが、私は楽でない方をやはり選びたいと思った。一本調子な紋切り型はいやである。⁴⁹

とある。ここでも、新中国で見てきたことを一度自己から離し、相対化していこうとする火野のスタイルがわかる。「赤い国の旅人」は、できるだけ、慎重に新中国をとらえようとする姿勢が見られる。ここに、思想や表現の自由を全うし、何物にも強制されまいとする戦後の火野の態度がうかがわれる。火野の新中国批判はこれだけにとどまらず、一九五五年三月三十一日に採択された全国代表会議の決議文をとりあげ、共産党でなければ悪人として処罰する指導者の方にむしろ問題があると書く。結局、作品の最後、五月四日には、「新中国はどこに行っても同じだ」と言い、全体主義の新中国全土の蔓延を憂える。そして、「私は自由を求めたい。平和を求めたい。私は新中国を天国とも地獄とも考えないが、真の自由と平和とを求める者の住みにくいところだと思ふ」と結論付ける。今の中国では、自由が無いので、ビールが飲みたくても自由に買いに行けない。だから、火野は、「ただ眠るよりほか仕方がないのである」。

このような、印象的な言葉で作品は終わる。

以上のように、『文藝』が掲載を見送った部分は、火野葦平の新中国、すなわち、共産党の全体主義的な思想への懐疑が書かれている部分であった。火野にとっては、そこが、最も書きたかった部分であり、真実をありのままに伝えようとする火野の新中国認識であったのだ。

終わりに

本稿では、これまでの先行論文ではとりあげてこなかった「赤い国の旅人」の成立に関わる問題をとりあげ、「中国旅日記」と作品を比較検討することで浮かび上がる相違点や共通点を明らかにした。さらに初出雑誌では発表できなかった部分に焦点を当て、火野葦平の新中国認識を考察した。火野葦平は、「後書」で

私は一日も早く、中国や北鮮との国交が回復し、平和のための交流がおこなわれることを祈らずには居られない。むしろかしい問題がたくさん横たわっていて、私などにはわからないことが多いが、真に平和への意志が強固であれば、破滅の戦争も避けられるような気がする。どんなことがあっても戦争をふたたびくりかえしてはならない。

と記している。アジア諸国会議の決議文でも火野は「作家である私自身はこのアジアの結合を文学の美しい鎖で結ぶことによって、絢爛とした平和の花園を現出したい欲望と夢とに狩られている」とし、真のアジア諸国の平和を願ってアジア諸国会議に参加し、新中国を訪問したのであった。火野にとっては、新中国の全体主義に、戦前の日本の軍国主義統制体制と重なる面を見たことで、失望したのかもしれない。

ただし、過去に戦争加害者であったという自らの体験を生かし、冷静に物事を観察した。火野は次のようにも記す。

前に兵隊として、また報道班員として中国各地を歴訪した私は、普通のルポルタージュや視察記ではなく、自分の精神の問題としての旅行記、また、一つの文学作品となるような魂の記録にしたいという意図があった。しかし書いてみるといろいろな事情で不備だらけになってしまつて、大切なテーマをとり逃がしたような気もする。しかし、それにもかかわらず「赤い国の旅人」はどうしても書きのこしておきたかつたものとして、今は満足している。⁵⁷

火野葦平が満足を得られたのは、「魂の記録」すなわち自己の正直な新中国見解を作品に描くことが出来たからではないだろうか。火野葦平は、権力者や政治の動きを静かに観察した。時には間違っていることを批判するという態度が、真の世界平和に結びつくことを「赤い国の旅人」というルポルタージュ風の小説で記したのである。しかし、普通のルポルタージュ風小説ではなく、自分を登場させながらも、火野葦平は、自分を批判する人間を配し、自己を相対化した客観的小説を構築している。このような火野の試みが、河上徹太郎の「赤い国の旅人」は「私にとつて最も同感を強いるものがあり、従つて私にはこれが正確なのだと思いますのである。こ

れ程誠実さというものを感じさせられた文章は近來知らない⁵⁸という評価に結び付いたのであろう。

- (1) 火野葦平『魔の河』(一九五七年一月二八日、光文社)
 - (2) 火野葦平『麦と兵隊』(一九三八年九月一九日、改造社) 火野葦平『土と兵隊』(一九三八年一月二四日、改造社) 火野葦平『花と兵隊』(一九三九年八月一日、改造社) のこと。
 - (3) 無署名『読書』二つの新中国見聞記 火野葦平著『赤い国の旅人』高木健夫著『おとなりの新世界』(『朝日新聞』一九五六年二月六日)
 - (4) 宇野浩二『独断的読後感』火野葦平の力作について(『東京新聞』一九五六年三月一日)
 - (5) 田中艸太郎『火野葦平論』(一九七一年九月一日、五月書房)
 - (6) 藤原耕作『叙説Ⅷ』(一九九六年八月一日)
 - (7) 拙稿『中国旅日記』(一九五五年四月) 翻刻(『東アジア文化交流研究』二〇一〇年三月三二日、第三号)
 - (8) 火野葦平『赤い国の旅人』(一九五五年二月二五日、朝日新聞社)
 - (9) 火野葦平『文藝』(一九五五年一月一日〜二月一日)
 - (10) アジア諸国会議日本準備委員会編『二四億人の声・アジア諸国会議およびアジア・アフリカ会議記録』(一九五五年五月二〇日、おりぞん社)
 - (11) 記録配信文について本稿で全て扱えないが、例えば火野葦平『中共通信』① まず東安市場へ 全くみられぬ「不潔さ」(『西日本新聞』一九五五年五月三二日)、火野葦平『中共通信』② 消えた泥棒市目の辺り見る人間改革(『西日本新聞』一九五五年六月一日)
- 火野葦平『中共通信』③ 驚異的に変わった天橋 しめだされたバク子とヤミ屋(『西日本新聞』一九五五年六月三日) などがある。

- (12) 初出未祥
- (13) 初出未祥
- (14) 火野葦平『新潮』(一九五五年一〇月一日、第五二卷一〇号)
- (15) 火野葦平『文藝春秋』(一九五五年八月一日、第三三卷一五号)
- (16) 火野葦平『婦人画報』(一九五五年八月一日、通卷六一二号)
- (17) 初出未祥
- (18) 鶴島正男「新編『火野葦平年譜』」(『叙説Ⅷ』一九九六年八月一日) 参照
- (19) いわゆる北海道赤平事件。一九五五年一月四日、中村翫右衛門は、日本に帰国する(昂奮した帰国の日 中村翫右衛門 もうすぐ孫が三人)(『東京新聞』昭和三十年二月二十八日) 参照
- (20) 李徳純に関しては、李徳純「旧奉天で過した安部公房氏の文学」(『朝日新聞』一九九六年三月一八日) や、李徳純「中国での遠藤周作紹介 日本軍国主義批判を評価」(『朝日新聞』一九九七年三月一日) などを参照。蘇琦に関しては、関西大学特任教授の萩野脩二氏に御教示賜った。この場をかりて御礼申し上げます。
- (21) 火野、『赤い国の旅人』(前掲書、九六頁)
- (22) 火野、同書、九六頁〜九七頁
- (23) 広州珠江のほとりにあるホテル。広州のランドマークと呼ばれる。
- (24) 「中国旅日記」に挿みこんである。(図1)
- (25) 火野、『赤い国の旅人』(前掲書、一一二頁)
- (26) 農民講習所での火野葦平の模写(図2)
- (27) 同書、一一〇頁
- (28) 火野葦平は中国の古典『聊齋志異』を「漢和辞典をひきながら熱心に読み、興味のつきざるものをおぼえた」(火野葦平「あとがき」『中国艶笑風流譚』一九五六年二月一〇日、学風書院) と記しているの、中国語や漢文を自力で読む力はあった。ただし、御三男の史太郎氏によると、おそらく通訳に頼って日本語訳をしたのであろうという。
- (図3)
- (29) 火野、『赤い国の旅人』(前掲書、二二七〜二二九頁)
- (30) 火野、『赤い国の旅人』(前掲書、二二九頁)
- (31) 兵隊三部作などの一連の作品をみるとよくわかる。
- (32) 火野葦平の手書きの絵は次の通りである。なお、絵の上の文字は増田周子が翻刻し、手書きした。(図4)
- (33) 火野、『赤い国の旅人』(前掲書、一四四頁)
- (34) 火野葦平『文藝』(一九五五年二月一日、第二二卷一五号)
- (35) 火野、『赤い国の旅人』(前掲書、二二三頁)
- (36) 同書、二二四頁
- (37) 同書、二四一頁
- (38) 同書、二四二頁
- (39) 同書、二四二頁
- (40) 同書、二四八頁
- (41) 同書、二五六頁〜二五七頁
- (42) 無署名「中共に密告の嵐 夫・父そして党員も 反革命の烙印 前歴・身分がたたる」(『讀賣新聞』大阪版 一九五五年九月六日)
- (43) 火野、『赤い国の旅人』(前掲書、二五七頁)
- (44) 李輝著千野拓政・平井博訳「囚われた文学者たち下」(一九九六年一月一五日、岩波書店) 参照
- (45) 火野、『赤い国の旅人』(前掲書、二六二頁)
- (46) 同書、二六六頁
- (47) 同書、二六二頁〜二六三頁
- (48) 火野葦平「今日の中国文壇」(上) 老舎曰く「日本の創作は雑技」(『東京新聞』一九五五年六月一四日)
- (49) 火野、『赤い国の旅人』(前掲書、二六七頁)
- (50) 同書、二八二〜二八三頁
- (51) 同書、二九三頁
- (52) 同書、二九四頁
- (53) 同書、二九九頁

- (54) 火野だけでなく、一九五六年一月に、日本中国文化交流協会の第一回目の「中国訪問日本文学代表」として訪中した宇野浩二も、「この町の文学者たちも、結局は、共産主義のイデオロギイにかなふものを書く」と云ひはつた」ことを記し、芸術家ならば、百人に一人か二人、千人に一人か二人は共産主義に懐疑的であつてもいいのではないかと回想している。(宇野浩二「忘れ固き新中国―新中国見聞記」『文藝』一九五七年三月一日)一九五〇年代の新中国を観察した日本人作家達の認識や見解がよくわかる。
- (55) 火野、『赤い国の旅人』(前掲書、三二二頁)
- (56) 火野葦平「全アジアを文学の美しい鎖で」(アジア諸国会議日本準備委員会編『一四億人の声・アジア諸国会議およびアジア・アフリカ会議記録』前掲書、二二四～二二〇頁)
- (57) 火野、『赤い国の旅人』(前掲書、三二〇～三二一頁)
- (58) 河上徹太郎「解説」(火野葦平集)一九五九年四月五日、筑摩書房)

廣州市馬路圖

正角一幣民人畫設華

行印月四年五五九一



火野葦平「赤い国の旅人」の成立と新中国認識

図 1

- 昔の孔子廟あと。猩々木。木綿の大木、昔は荒れはててゐた。
- 教習処 質素な机、椅子、寝台

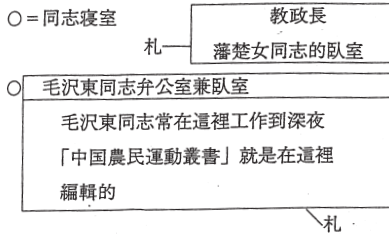


图 2

水上民歌
翳洪原作

漢民對唱

你頭對面雙槳舟搖搖浪上。 <small>あなたを向いにおたふし、うねうねのなみをゆりながら、ゆりながら</small>	珠江水面升起半边太陽。 <small>珠江の水面に、半邊の太陽がのぼる</small>
船頭漢夫身體健壯 <small>船頭の漢夫、からだは健康</small>	着條票紗短褲露赤色脚脛 <small>ちりょうひょうさのたんくろ、あかいろのあしづねをあらわす</small>
但滿面笑容搖呀搖住對漿 <small>がぜん笑顔で、ゆらゆらとこらへて、こらへて</small>	又回頭望下船尾响位姑娘 <small>またうしろをみれば、船の尾にうらやまのこがら</small>
有陣高声把歌仔表唱 <small>うたをうたうとき、こゝろはうたをうたう</small>	有意聲細讀好似有喜事商量 <small>うたをうたうとき、こゝろはうたをうたう</small>
只有群放今天至有咁耐暢 <small>うたをうたうとき、こゝろはうたをうたう</small>	想起國民黨時候浪水像海洋 <small>うたをうたうとき、こゝろはうたをうたう</small>
辛苦打漁又俾惡棍來搶 <small>うたをうたうとき、こゝろはうたをうたう</small>	擄去漢網如捉我命又擔衣裳 <small>うたをうたうとき、こゝろはうたをうたう</small>
刺番幾條漢飲賣未將甘養 <small>うたをうたうとき、こゝろはうたをうたう</small>	又俾漢摘大秤攞利有行 <small>うたをうたうとき、こゝろはうたをうたう</small>
找地今天漢民有共共產黨 <small>うたをうたうとき、こゝろはうたをうたう</small>	悠悠決定飄在江洋 <small>うたをうたうとき、こゝろはうたをうたう</small>
賺佢幾餅辛苦又撒一網 <small>うたをうたうとき、こゝろはうたをうたう</small>	有吳有蚌有架白蟻民長 <small>うたをうたうとき、こゝろはうたをうたう</small>
雪白海鮮食殘真歡暢 <small>うたをうたうとき、こゝろはうたをうたう</small>	刺番大澳大鱗買去國營漢市場 <small>うたをうたうとき、こゝろはうたをうたう</small>

珠江區文化館精印

珠江工作部

图 3



図 4

There are, however, differences in the contents between the novel presented in the journal *Bungei* and that in the first edition. The last serialization in *Bungei* was much shorter than the first and second serializations (which were consisted of about 100 pages with 400 letters format). Indeed, Hino Ashihei states in his postscript at the last serialization that “I have started writing with a promise to write three times with hundred pages. However, three hundred pages were not enough at all. In addition, the third serialization turns out to be the one which can only be published with about fifty pages, due to certain circumstances. ...The followings of this will be planned to be published in a form of a book from Asahi Shinbunsha, as a newly written novel.” Although it is only a conjecture, “certain circumstances” would indicate the suspension by the editorial office for *Bungei*. What he could not be permitted to publish could have been, however, what he wanted to appeal to the public most concerning his regards toward new China. This paper will pick up the novel part from the first edition and focus on the parts Hino could not publish in the journal. Along with the examinations on various materials such as correspondence from new China as well as the *Diary*, this paper will investigate what Hino Ashihei would like to appeal to the public.

Key Words; Hino Ahihei, The Congress of Asian Countries,
The *Diary of Tour in China*,
The matter of deletion from the first published journal,
Hu Feng胡風, Beijing, Guangzhou, Wuhan

The Recognition toward New China written in the Novel
“The Traveler in the Red Country” by Hino Ashihei
—Mainly in Comparison with *Chūgoku Tabi Nikki* 中国旅日記 (Diary of Tour in
China) and about Deletions from the First Published Journal—

MASUDA Chikako

From the 6th to 10th of April in 1955, the Congress of Asian Countries had been held at New Deli in India. 200 representatives attended for from 14 nations this congress. Japan also sent 34 people to attend six divisions like “political matter” and “religious matter”, in addition to 2 observers. Hino Ashihei was one of the nine Japanese representatives sent to India to attend the division for “cultural matter”. On returning from this congress, 28 people including Hino Ashihei visited the People’s Republic of China to see the situation in new China after the liberation.

Hino Ashihei recorded this visit to new China from 21st of April to 4th of May in detail, in *Chūgoku Tabi Nikki* 中国旅日記 Diary of Tour in China (reprinted version by MASUDA Chikako in *Higashi Ajia Bunka Kōryū Kenkyū* 東アジア文化交渉研究 (Journal of East Asian Cultural Interaction Studies), March, 2010). He even sent correspondence of his record from China to the various Japanese medias. Returning to Japan, he started to write serial story in a form of travel sketch, based on his diary and correspondence of record under the title of *Akai Kuni no Tabibito* 赤い国の旅人 (The Traveler in the Red Country) (in “*Bungei*” 文芸 from October to December in 1955). Later, he published the first edition of *Akai Kuni no Tabibito* 赤い国の旅人 (The Traveler in the Red Country) (from Asahi Shinbunsha in 1955) in a book form which was based on a serial story but added about the New Deli as well as about Korea where he visited after his stay in China.

This novel has hardly been studied. There are only a few contemporary critiques and only one preceding academic study by Fujiwara Kosaku 藤原耕作, *Akai Kuni no Tabibito- Ashihei no Mita Chūgoku* 『赤い国の旅人』—葦平の見た中国 (The Traveler in Red Country – China Witnessed by Ashihei) (*Jyosetsu* 叙説 (Statements) vol. VIII. August in 1996). These preceding materials, however, did not consider about the *Diary of Tour in China* which was the foundation of the novel as well as correspondence of records which Ashihei sent from China. Having an opportunity to reprint the *Diary of Tour in China*, I could have investigated the differences and mutual points between the *Diary* and the novel. This paper firstly presents the comparison and contrast between these two texts.